

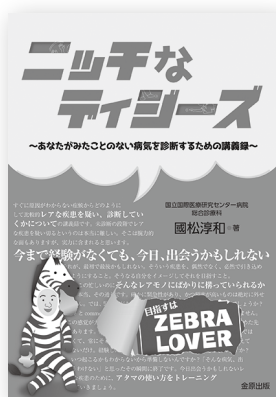
#書評



出会ったことがない病気を診断するために

評者 忽那賢志

国立国際医療研究センター
国際感染症センター・総合感染症科



ニッチなディジーズ

あなたがみたことのない病気を
診断するための講義録

國松淳和＝著

定価：本体 3,500 円＋税

A5・264 頁／金原出版／2017

[ISBN978-4-307-10184-4]

ニッチなディジーズ……要するに稀な
邦初の〇〇」といった感染症をいくつか
が、そんな私を「あいつはシマウマ探し

もいるという。しかし、稀な疾患の診断というのは、医師にとって、まさに國松淳和氏の言うとおり「倖俣」なのである。

近い将来、AI（人工知能）の技術が医師の仕事を奪っていくことになるだろう。内視鏡検査、超音波検査、そして外科手術まで……。しかし、そうしたなかで一番 AI に取って代わられにくい領域はどこか？ 2017 年 4 月に開催されたあるシンポジウムでのそんな質問に対して、AI 技術の専門科である医療 CG プロデューサー瀬尾拓弘氏とメディアアーティストの落合陽一氏は、「超珍しい病気の診断は AI にはできないだろう」と答えていた。話している内容が難しすぎて半分からいしか理解できなかったが、要するに「超珍しい疾患」だと統計的な処理ができず AI には向かないとのことであった。すなわち、「ニッチなディジーズ」を診断することは、医師に残された最後の聖域とも言える。

國松氏の思考プロセスを惜しげもなく披露

『ニッチなディジーズ』は、その名のとおり「稀な疾患をどうやって診断するのか」について書かれた本である。著者の國松氏は国立国際医療研究センター病院 総合診療科の医師であるが、私も同じ病院に勤務し、ときどき症例相談をしている立場である。たとえば不明熱症例のコンサルテーションをする際には、いわゆる「（不明熱として）よくある疾患」はすでに除外されており、まさに國松氏に泣きつく状態でのコンサルテーションとなる。そんな時に氏からは「いや、この振る舞いはリンパ腫ではないですね……」とか「TRAPS（TNF 受容体関連連周期性症候群）もありえそうですね……」とか、核心をついた答えがポンポンと返ってくるのである。これは、当院で働く者の役得といえるだろう。

それにしても、私と 1 つしか学年が違わない國松氏から、なぜレアな疾患を知り尽くしたような回答が返ってくるのであろうか。ナショナルセンターの総合診療科ということで「ニッチなディジーズ」がたくさん集まってくるということはあるだろうが、いくらなんでも稀な疾患ばかりを診まくっているわけではないだろうに不思議だなと思っていたのだが、この本を読んでようやく理解した。あまり書いてしまうと本書を読む楽しみがなくなってしまうが、なぜ彼がニッチなディジーズを的確に捉えることができるのか、どうすれば初見であっても正しく診断できるようになるのか、いわば「國松氏のアタマの中」について解説されている。このような書籍は、これまでになかったのではないだろうか。

たとえば第 7 講に登場する「病態の分類」。これは國松氏によるオリジナルの疾患の分類であるが、彼がどのように疾患を捉えているのかがわかる秀逸な分類法であると思う。あるいは、2 講のタイトル「カタマリをつくらないリンパ腫」。このように氏は、稀な疾患を「國松フィルター」を通して分類・咀嚼し、自分のアタマの中の引き出しに入れているのだろう。そして、そのアタマの中の開陳っぷりも、また見事である。稀な疾患の捉え方だけでなく、稀な疾患を診断するための勉強法や心がまえについても紹介されている。

ぶっちゃけ、本書に登場する疾患の半分は私にとって初めて聞いたようなレアな疾患であり、「なんだよ Erdheim-Chester 病って……エド・はるみかよ」という感じであるが、本書を読んだあとでは、なんとなく私でも次から診断できるような気になってくるから不思議である。「ああ、エルドハイムちゃんね、はいはい」てなもんである。そう、國松氏があとがきに書いているように、ニッチなディジーズの診断は「そんな病気、出合うわけない」と思った瞬間に終了なのである（たぶん『SLAM DUNK』を意識して書いた一文だと思う）。

いつシマウマが来てもいいように、本書を読み「ZEBRA LOVER」になってシマウマが来るのを待ちかまえておこうじゃないか！

G